

国語 I

二〇二一年度 東洋英和女学院中学部 入学審査問題 A

受験番号

写

氏名

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。答えは、指定されたもの以外はすべて黄色の解答用紙に書きなさい。

放課後、校庭のフェンスによりかかってサッカー部の練習を見物していた音和は、部活動をどうするかについて担任の河井に呼びだされていたことを思いだして職員室へ急いだ。すると、二階の学習室に来るようにとの伝言で、いつてみるとそこは、一面にたたみを敷きこんだ部屋だった。

花をいけている生徒と、書道をしている生徒と、編みものをしている生徒がいた。その全部の顧問を、国語教師の河井が担当している。男子もいるが、女子のほうが圧倒的に多い理由は、部活動の内容というよりは顧問にあるようだった。

まえの学校から送られてきた資料によれば、と河井は手もとの用紙に目を通しながら、話しはじめた。

「生徒会副会長、①サッカー部副部長、国語の3以外は、4か5. ということは、②まえの学校の国語教師はトンチキだったんだな。」

「苦手だっただけです。」

「教師が？」

「長文の読解がです。」

「それはないだろう。調査書に、趣味は読書と書いておくせに。」

音和は保護者の欄に別居した母の名を書かなかったのとおなじく、趣味の項目にピアノのことを書かなかった。③その空白はどちらも、彼の意に反して生まれたという点で同質なのだ。

「A」しか読みません。『趣味の盆栽』とか『熱帯魚の飼育方』とか『図説古代の墓と埋葬』とか。」

それはウソだった。祖父のおさがりである「A」をはじめとして、音和はそのほか手あたりしだいに読んでいた。父の書棚にあるものも、各種の説明書やコウノウ書きも新聞も楽譜も、すべて読む対象だった。ただ、本を買ってくることはほとんどない。手近にあるもので、まにあわせていた。

④きみの性格が、だんだんわかってきたよ。ところで、この状況をどう思う？」

河井は、たたみの部屋を見わたしてたずねた。大半を占める女子生徒たちが妙に静かなのは、部屋のかたすみにいる教師と音和の話に聞き耳を立てているからだ。しかし、話の内容は、窓ごしの木々をゆする風にかき消されているはずだった。

「平穏ですね。」

「男子生徒が少なすぎる気がしないか？」

「サッカー部とくらべてですか？」

「……という考えかたもあるな。」

音和は以前、ピアノのレッスンのさまたげとなる指の故障を回避できそうな部活動として、サッカー部に所属していただけだった。レギュラーだったわけではない。ピアノを弾かない今となつては、バレー部でも野球部でもかまわないのだ。

ただ、彼の体質としては、おのおのの役割と目標がはっきりしている運動部のほうが性にあっていった。なにかを決定するのに、たがいの意見の調整が必要な文化系の部活動は、彼にはうっとうしい印象しか持てなかった。

河井の口ぶりは、男子部員の少ない部活動に音和を引きいれようとするかのようでもある。彼としては、いくら河井の話がおもしろくても、そればかりは承知できなかった。

「あれはなんですか？」

話をそらす機会をさがしていた音和は、学習室の外のテラスに風変わりな小屋を見つけた。戸口に新聞部と書いてある。しかし、部屋にしては小さく、百葉箱にしては大きすぎる。

各教室のまえに、ひろびろと張りだすテラスがついている。それは、地下一階、一階、二階とブロックを積んだようにつらなる校舎の、それぞれひとつ下の階の屋上部分なのだった。

「鳩小屋だよ。」

河井は、はじめに鳩舎と云い、それを音和が「厩舎と聞きまちがえたので、あらためて云いなおしたのだ。」

「新聞部で鳩を飼っているのさ。ついでながら、⑤新聞部の顧問も私だ。」

「鳩？」

「ただの鳩じゃない。通信員として働く鳩だよ。脚輪に通信管をつけて翔ぶように訓練してあるんだ。通信管は、長さ四センチ、直径一センチの軽量アルミニウム管だ。それでも通信紙をいれると七グラムぐらいになるから、四百五十グラムほどの鳩の体重から考えればけっこうな重さだ。」

「その鳩と新聞部とは、どういうつながりがあるんですか？」

音和がイメージする新聞部の活動とは、学校の行事を中心とした記事を編集し、それを印刷するか、壁新聞として校内のどこかに掲示する、といったものだった。だから、鳩とはまるで結びつかなかったのだ。

河井はちょっと見てごらんと云つて、東京の街を写した古い報道写真集を資料戸棚から持ちだしてきた。カラー写真ではない時代の、モノクロのズハンばかりだった。表紙は、有楽町にあった新聞社の社屋の全景だ。その上空に胡麻をまぶしたように、小さな点がたくさん写っている。

「これがなんだかわかるか？」

「鳥の群ですね。」

「そう、これは鳩だよ。軽く二百羽はこえていると思う。ある時代まで、東京の空には、こんなふうに大きな群をつくる鳩がよく翔んでいたんだ。どうしてだと思う？ そのまえに、もうひとつ説明しておこう。⑥この鳩たちは野鳥じゃない。」

それは、音和にとって予想外だった。⑦公園で見かける鳩が群になつている写真としか思わなかった。その鳩たちは、スズメやカラスとおなじように街路で暮らしている。だから、当然野鳥のはずだった。

「私が云っているのは、ドバトのことだけだね。」

河井にうながされた音和は図書室へいき、日本の野鳥図鑑を借りてきた。学習室へもどる。a道すがら図鑑をめくり、ハトでもドバトでも見出しがないことをたしかめた。ハト科のところに、アオバトとシラコバトとキジバトが載っていたが、どれも音和がイメージする鳩ではなかった。

「では、ドバトとはなにか？ 最初の写真にもどろう。この新聞社の上空を翔んでいる鳩は、新聞社で飼っている鳩を運動させているところなんだ。bひとしきり翔んだのち、ちゃんと鳩舎へもどる。この鳩が野生化するとドバトになるのさ。ただし、ブンチョウや



セキセイインコとおなじくもとは飼い鳥だから、野鳥とはよばない。この写真はいまから四十年以上も前のものだが、この時代にはこの新聞社でも二百羽から三百羽の鳩を飼っていた。通信用にね。さて、これで鳩と新聞部にどういうつながりがあるかという最初の問いへもどったわけだ。鳩が二ユースを運ぶんだよ。B じゃ

ない。かつてはCの通信手段だったんだ。私もふくめて、今のように通信網が発達した世の中に生まれた者にとつては想像しにくいことだが、昔の電話は、いちいち交換台を通していたから、遠方の相手さきにつながるまでずいぶん待たされた。一時間、二時間は

ざらだったそうだ。電報では送る文字数に制限があった。そんな時代に、取材にでた新聞記者たちが原稿を本社へ送るもつとも確実に速い方法は、小さくてうすい紙に記事を書いて、鳩の脚につけた通信管におさめて空へ放つことだったんだ。交通の便の悪い山岳部や船上や災害地ならば、なおさら鳩のほうに役に立つ。だから、新聞社や船会社や消防本部の屋上には鳩小屋があったのさ。伝書鳩というのを聞いたことがあるだろう？ 新聞記者たちは取材さきで記事を書き、すみやかに本社へ送る手段として鳩をつかったんだ。昔の記者は、携帯電話のかわりに数羽の鳩を持ち歩いたわけさ。記事を書くごとに一羽ずつ放つ。あるいは、鳩が事故に遭う場合を考えて、おなじ通信文を複数の鳩に託した。通信技術が進歩したいまも伝書鳩のイメージは受けつがれていて、ほら、パソコンで電子メールを送るときに、フォルダからヒラヒラと紙を飛ばす画像があらわれるだろう。あれは伝書鳩をイメージしているんだと思うよ。……なつとくしていい顔だな。」

音和はうなずいた。おなじ鳥類でも、鷹狩りにつかう猛禽類や鶉飼いの鶉ならば、訓練しただけで指示にしたがわせることも可能だと思えたが、鳩の場合はどうしても労働と結びつかなかった。それだけの知能と運動能力をみとめられなかったのだ。「記者が太急ぎで本社へもどったほうが、鳩より速そうな気がするけど、」

「昭和三十年代までは、まだ電化されていない鉄道がいくらかもあったし、道も悪かった。電化されていない鉄道というのは、つまり蒸気機関車やディーゼル車のことだ。山間部の鉄道は、いまの何倍も時間をかけて峠を越えていたんだよ。とちゅうで給水をしたり、スイッチバックをしたりしながら。もちろん、青森と北海道のあいだにはトンネルもない。船で津軽海峡をわたるだけで四時間はかかった時代に、鳩のなかには函館から東京まで半日でもどつてくるつわものもいたんだ。新聞社の鳩は夜間も翔べるように訓練されていたからね。記事だけでなく、写真のネガや図面を運ぶこともあった。その場合は、鳩の背なかに筒を背負わせるんだ。そんなのは宅配業者が運ばないときみは思うだろうけど、そのころはまだ今のような宅配便はない。山岳地帯や雪国の場合は道路もなく、郵便配達員は豪雪のなかを歩くしかない。それにくらべれば鳩のほうははるかに速い時代があったんだよ。そう遠い昔の話じゃない。たかだか半世紀前のことだ。」

半世紀前は、はるかに遠い過去であると音和は思ったが、彼の興味は鳩が通信を運ぶことのほうにあった。「鳩は、届け先を理解できるんですか？」

⑧ 河井は笑い声をたてた。「宅配便の業者や、郵便配達員のように？ そうじゃないんだ。鳩たちは、どこにいても、必死になって自分の巣へもどつてくるだけさ。だから、新聞社は屋上に鳩舎をおくんだ。巣に帰る本能のことを帰巣本能と云う。鳩は鳥類のなかでもとくにその帰巣性が高いんだ。コタイサがあるから、迷子になる鳩もいるけど。ほかの鳥類にくらべて鳩の能力がとくに高い理由は、わかつていない。オウロは人によつて運ばれてゆくのに、ちゃんと帰るべき巣のある方向がわかるんだ。なぜかは謎なんだよ。鳩の脳についても、そのていどにしか解明されていない。まして人間の脳なんて、ほとんどが未踏領域というわけさ。」

「ミトウケンイキ？」

河井は、黒板に「未踏領域」と書き、さらに未知の土地のことだと説明した。

「でも、こんな比喩は理系人間にはよろこばれないだろうな。脳はジャングルのような場所ではなくて、もつと電氣的な組織だから。……なんてことは工学部を出ている井上のおとうさんのほうがくわしいよ。興味があったら家できいてくれ。」

井上は音和の名字である。「父は、ただの写真屋ですよ。」

⑨ 音和のその云いかたは、父のためにはフェアではなかった。伯父に雇われた結果として現在は記念写真のカメラマンに甘んじているのだが、もともとは映像を主体としたヴィジュアルアートの制作や編集をする会社の技術者であり経営者だったのだ。広告代理店の依頼を受け、企業が新製品の展示場でイメージとして流す映像や、イベントホールの雰囲気づくりにつかわれる映像の制作や編集をしていた。

いつぼうで、光学機器とCGを駆使した学術的な映像も手がけ、硬軟とりまぜた分野で特技を生かしていたのだ。

好景気のときには、⑩はかばかしいほどの報酬がしはられたが、不景気になったとたん、いずれの企画も予算は大幅にけずられ、父の会社も半年単位で収入が大きく下降した。昨年の秋以来、息子の前でも平気で口争いをするようになった両親の会話を耳にはさんだ音和が理解したのは、だいたいそういうことだった。

ただの写真屋だと云い放ったあとで、彼は口では訂正しなかったが、河井から⑪無言の指摘を受けるまでもなく、⑫父に悪いことをしたという意識はあった。世の中を、というよりおとなのふるまいを批判的にみる癖がついていた彼は、自分自身がフェアでないことにも鈍感ではいられなかった。

河井は音和の心の動きを察して、いったん厳しくなった表情をすぐにやわらげた。

「私もただの教師だ。きみもただの生徒。……どこまで話したっけ？」

「鳩の帰巣本能の話でした。国境も越えるんですか？」

「そういう例もあるが、島国の日本では国内にかぎられる。翔ぶ距離も数十キロから、数百キロだよ。東京から函館がだいたい七百公里で、国内としてはかなりの長距離になる。」

「その距離を半日でもどるということは、一時間に六十キロぐらいを翔ぶんですね。」

「おおよそ一分間に一キロだよ。鳩の場合は、距離とシヨウウ時間間で分速を割りだすんだ。どんな長距離でも休みなしで帰ってくる。」

「飲まず食わずで？」

「そう。腹がすいて、のどが渇くから巣へもどるんだよ。そういうふうに訓練するんだ。山間部では悪天候はむろん、鷲や鷹などの猛禽類を警戒しなくてはならないし、都市部には肉食のカラスが山ほ

どいろ。のんびり休んでゐるひまもなければ、安全も確保されていない。緊張の連続のはずだ。彼らは一刻もはやく安らぎたくて、わきめもふらず、ただひたすらに鳩舎をめざすというわけさ。㊤ちよつとは鳩を見直したか？」

音和はうなずいた。

新聞部への入部を勧誘した吉岡も、鳩のことを云つていたのを、音和は今さらながら思いだした。見にくるよう誘われていたのに、実行していなかった。もとより、まじめな誘いとは受けとめなかつたし、その後に校内ですれちがつても、^{注4} ババを踏むなよ、と笑いながら声をかけてくるだけで強引な勧誘はなかった。

都心のマンションで暮らしていたころ、音和が抱いていた鳩の印象というのは、テラスに巣をかけようとして、なんど追いはらつてももどつてくるしつこさだった。あるいは、寺や公園や街路にいる

黒ずんだ色のドバトだ。それを飼育していると聞いても、物好きだ
と思うだけでなんの興味もわかなかった。

（中略）

音和はサッカー部の練習に、仮参加してみたぐあいでは結論を出す
と河井につたえた。

(中略)

(『野川』長野まゆみ)

【注】

- 1 厩舎…馬小屋。
- 2 猛禽類…大型ですらどいつめやくちばしを持つ肉食の鳥のこと。
- 3 スイッチバック…折り返し式の鉄道線路。
- 4 ババ…動物のふんなどのきかないもの。

問一 本文中の力タ力ナを漢字に直しなさい。

問二 ① サッカー部副部長とありますが、サッカー部に入っていた理由は何でしたか。二点にわけて答えなさい。

問三 ② まえの学校の国語教師はトンチキだったんだなとありますが、「トンチキ」とはここではどのような意味ですか。次から一つ選び記号で答えなさい。

ア 考えの浅いぐず
イ えこひいきをするいじわる
ウ 人の良さを見ぬけないまぬけ
エ ばか正直なかつたぶつ

問四 ③ その空白はどちらも、彼の意に反して生まれたとありますが、「彼の意」とはどういうことですか。二つ答えなさい。

問五 空らん A に入る語を次から一つ選び記号で答えなさい。

ア 学術書
イ 実用書
ウ 文芸書
エ 学習参考書

問六 ④ きみの性格が、だんだんわかつてきたよとありますが、河井は音和の性格がどんなものだと感じているのですか。次から一つ選び記号で答えなさい。

ア 冷静に自分を見つめて常に反省をする、けんきよな性格。

イ 自分を認めてくれる言葉を聞いても真に受けることをしない、さめた性格。

ウ 教師の言うことなどにまったく耳を貸そうとしない、がんこな性格。

エ 自分に自信が持てず必要以上にへりくだった態度をとる、いじけた性格。

問七 ⑤ 新聞部の顧問も私だとありますが、河井が新聞部以外に顧問をしているクラブを次から**すべて**選び記号で答えなさい。

ア 文芸部
イ 美術部
ウ 生物部
エ 書道部
オ 手芸部
カ 写真部
キ 茶道部
ク サッカー部
ケ 華道部かどう



問八 河井先生の説明によると ⑥この鳩たち と ⑦公園で見かける鳩 とのちがいは何ですか。解答らんにしたがって答えなさい。

問九 a 道すがら と b ひとしきり の意味をそれぞれ次から一つ選り記号で答えなさい。

- | | | |
|----------|------------|-------------------|
| a 道すがら | ア 道を歩く間 | ア そこらじゅうちらばっている様子 |
| イ 道の最初から | イ 道の片すみで | イ きちんとまとまっている様子 |
| ウ 道の片すみで | エ 道に立ち止まって | ウ しばらくの間続く様子 |
| | | エ いっぺんに行動する様子 |

問十 空らん B と C に入る語の組み合わせとしてふさわしいものを次から一つ選り記号で答えなさい。

- | | | | |
|-----------|-----------|-----------|-------------|
| ア コメディ・必死 | イ ジョーク・格別 | ウ トリック・人気 | エ ファンタジー・現実 |
|-----------|-----------|-----------|-------------|

問十一 ⑧河井は笑い声をたてた とありますが、どのような気持ちから笑ったのですか。あてはまらないものを次から一つ選り記号で答えなさい。

- | |
|-------------------------------------|
| ア 音和の質問に説明の糸口を得て、うれしがっている。 |
| イ 音和の発言が思いがけなかったので、おどろきあきれている。 |
| ウ 音和のすなおな知りたがっている反応に、好感をもっている。 |
| エ 音和の鳩を知能の高さで理解しようとする発想を、ゆかいに思っている。 |

問十二 ⑨首和のその云いかたは、父のためにはフェアではなかった について、次の(1)・(2)に答えなさい。

- (1) 「その云いかた」とは「父は、ただの写真屋ですよ。」という発言を指していますが、それはどのような云いかたですか。簡単に答えなさい。
- (2) 「父のためにはフェアではなかった」とはどのような点がフェアではなかったのですか。次から一つ選り記号で答えなさい。

ア 本来の父の姿を考えた上で公平に父の仕事を評価しているとはいえない点。
イ 工学部を出ている父を認めてくれていることを素直に喜ばなかった点。
ウ どんな仕事も価値の優劣はないはずなのにやたらに差をつけている点。
エ 父の仕事の内容を理解せずに勝手に父の仕事を悪く言っている点。

問十三 ⑩ばかばかしいほどの報酬がしはられた とありますが、どのようなであったということですか。次から一つ選り記号で答えなさい。

- | |
|------------------------------------|
| ア ほんのわずかな労働で、たくさんの報酬を得られたこと。 |
| イ いろんなことをやっても、無計画に報酬がばらまかれたこと。 |
| ウ けんめいに働いても、たいしたことのない額の報酬であったこと。 |
| エ 真面目に働いているのがいやになるほど、みな同じ報酬であったこと。 |

問十四 ⑪無言の指摘 とありますが、そのよすを表現している部分を文中からさがし、十二字で答えなさい。

国語一五

二〇二一年度 東洋英和女学院中学部 入学審査問題・解答用紙A

受験番号

写

氏名

問十五 ⑫ 父に悪いことをしたという意識はあったとありますが、なぜ悪いことをしたと感じているのですか。父の置かれた具体的な状況を考えて説明しなさい。答えは左の解答らんに直接書きこむこと。

問十六 「…⑬ ちよつとは鳩を見直したか？」音和はうなずいた。とありますが、どう見直したのですか。次から一つ選び記号で答えなさい。

- ア これまで鳩に対しては、黒ずんだ色のきたない鳥だと思ってきたが、人が手をかけ訓練をすれば、伝書鳩としてのイメージが現代に引きつがれるほどの美しい鳥になるのだとわかった。
- イ 音和は、鳩を公園でのんきに暮らしていたいて飛べない鳥だとばかり思っていたら、じっさいは肉食の鳥などをおそれることなく長距離を翔び続けることを知って、気のあらい鳥であることがわかった。
- ウ これまで鳩に対しては、公園にいたり住居に近づいたりしてめいわくをかけるばかりの鳥と思っていたが、早く正確に届け物をする高度な知能を持った鳥だとわかった。
- エ 音和は、鳩はあまり強くもなく優秀でもないと思っていたが、じっさいは長時間の緊張にたえて翔ぶ、たくましくけなげな鳥であることがわかった。

問十七 本文の流れを、はじめから追つてどのようになりますか。次の空らんにあてはまるようにア～カを並びかえ記号で答えなさい。

河井先生に評価される		
(	1	)
(	2	)
(	3	)
図書室へいく		
河井先生からかつての新聞記者の通信手段について説明を聞く		
(	4	)
(	5	)
(	6	)

- ア 河井先生から帰巣本能の説明を受ける
- イ 部活動に誘われたと感して困惑する
- ウ 河井先生から写真を用いて説明される
- エ 鳩小屋を見つける
- オ 働きぶりを知って鳩を見直す
- カ 父の話題にふれる

問十八 この本文の後、音和は新聞部に入部することになりますが、それは音和にどのような心境の変化が起きたからですか。本文から読み取り、解答らんに合うように答えなさい。答えは左の解答らんに直接書きこむこと。

最初は

とっていたが、

と思うようになったから。

国語

二〇一一年度 東洋英和女学院中部 入学審査解答用紙 A

受験番号

写

氏名

コウノウ

ズハン

コタイサ

オウロ

シヨヨウ

問一

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

「この鳩たち」は野鳥ではなくて

であり、

「公園で見かける鳩」は

という違い。

問九

a

b

問十

問十一

問十二

(1)

(2)

問十三

問十四

問十五

(国語一五)

の解答らんに直接書きなさい

問十六

問十七

1

2

3

4

5

6

問十八

(国語一五)

の解答らんに直接書きなさい